

若紫巻を中心とした紅梅文庫旧蔵本の分析

上野英子

【要旨】

紅梅文庫旧蔵本は、藤原定家自筆『奥入』にみられる残存本文（定家が所持していた、もう一つの揃い本源氏物語本文で、その形態から〈六半本〉と呼ばれる）に最も近い本文であったが、近年、藤本孝一氏によって紹介されたところの『定家本若紫』（四半本）と比較するとどうなのか、定家本系諸本内に於ける異同結果からみた紅梅文庫旧蔵本の位相分析をはじめとして、若紫巻における同本の書き入れや本文料紙について報告した。

これまで「いま、なぜ三条西家本なのか」「いま、なぜ、紅梅文庫旧蔵本なのか」と論じてきた。これらを承けて本稿では、若紫巻を中心に、紅梅文庫旧蔵本（以後、紅梅文庫本と略）を中心とした三条西家本の具体相を、以下の観点から分析してみようと思う。

一、新出四半本若紫巻と三条西家本との位相

二、紅梅文庫本の書き入れ

三、紅梅文庫本の本文料紙

このうち（二）は報告書を発表後^①、中城さと子氏の御指摘を受けて、熊本大学教育学部所蔵本（以下、熊大本と略）が、紅梅本と同じく（上蔵局本）の転写本であることが確認でき^②、両本の比較から紅梅文庫本の書き入れが同本独自に加わったものであることが判明したため、内容を一部修正している。なお熊大本は損傷が激しく閲覧することは叶わなかったが、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースにマイクロフィルムに収めた画像が公開されている^③。よって画像などで把握できた基本書誌や、紅梅文庫本と共通する書入れ注記については本誌付録にて報告することにする。

一、新出四半本若紫巻との位相

稿者は、三条西家の人々が「当流の本」として用いていた青表紙本は、定家の（四半本）ではなく、もうひとつの定家本とされている（六半本）の流れを汲むものでなかったかと考えている。そして紅梅文庫本が藤原定家の（六半本）に最も近似していたとの調査結果も、既に発表した^④。

折しも二〇一九年、藤本孝一氏によって定家監督書写本四半本若紫巻

（以下「新出四半本」と略）が新たに紹介され^⑤、その本文については、夙に新見哲彦氏による詳細な分析結果が報告されている^⑥。そこでは種々の報告がなされていたが、本稿と直接関連すると思われたのは、次の三点である。

（イ）「新出四半本」は、（四半本）定家監督書写本と認定できること。
（ロ）しかし同本には僅かではあるが欠脱部分のみられることから、

現在の定家本系全体の祖本では無いと考えられること。

（ハ）そのことは（四半本）の成立は（六半本）より遅れるという先行諸研究と同様の結論を示すこと。

この新見論文も視野に入れつつ、本稿では稿者なりの立ち位置から、「新出四半本」と（六半本）との関係を確認したのち、三条西家本の基幹となる紅梅文庫本と日大本が、周辺諸本の中で「新出四半本」に対してどのような位相を示すかを見ていきたいと思う。

【対校諸本】

始めに、今回用いた諸本（八本）を列挙し、それぞれについて説明しておく。各本とも書名の後に（ ）印を冠して、本稿で用いた略称と略号を挙げておいた。なお紅梅文庫本と山岸明融本以外はすべて影印で処理した。

- ① 個人蔵藤原定家監督書写四半本（新出四半本・定）藤本孝一監修『定家本若紫』（二〇二〇年、八木書店刊）
- ② 天理図書館蔵池田本（池田本・池）『新天理図書館善本叢書 第十三巻 源氏物語池田本二』（二〇一六年、八木書店刊）
- ③ 聖徳大学蔵吉田幸一氏旧蔵伏見天皇本（伏見本・伏）『源氏物語

二「伏見天皇本」(平成三年、古典文庫第五三三冊)

④ 日本大学所蔵三条西家証本(日大本・日)『日本大学蔵源氏物語
第一巻』(平成六年、八木書店刊)

⑤ 個人蔵紅梅文庫旧蔵本(紅梅文庫本・紅)

⑥ 天理図書館蔵伝肖柏筆本(肖柏本・肖)

⑦ 平安博物館蔵大島雅太郎氏旧蔵本(大島本・大)『大島本源氏物語
第一巻』(平成八年、角川書店刊)

⑧ 実践女子大学蔵山岸徳平氏旧蔵伝明融等筆本(山岸明融本・明)

このうち鎌倉時代の写本とみられるのは、①新出四半本②池田本③伏見本の三本である。②は池田亀鑑氏によって大島本につぐ善本とされた写本であり、若紫巻も同本の基幹となる鎌倉期書写四十八冊のなかのひとつ。③には青表紙本系と河内本系とが混在するが、若紫巻は青表紙本系で、かつ基幹となる鎌倉中期書写四十冊のひとつという。寄合書きで奥書識語無し。なお「伏見天皇本」とは旧蔵者吉田幸一氏による命名(鈴虫・夕霧巻を伏見天皇宸翰と判断されたことに拠る)だが、その後「即断に過ぎた」と撤回されている⁽⁷⁾。伏見天皇か否かはさておき、書写年代については③もまた鎌倉期とみてよさそうである。

残り五冊は室町期の写本である。若紫巻の場合、⑦大島本は宮河印のない補写の巻に相当する。そして最終丁は筆跡が異なっており、藤本氏の解説に拠ればこの部分は「底本の書風を残したもの」という⁽⁸⁾。三条西家の家本となった④日大本は、実隆最晩年の写本(夢浮橋に享禄四年実隆奥書)で、若紫は公条による書写。⑤紅梅文庫本には若干の本文訂正や異文注記・鈎点・朱点などがあるが、他の諸帖と比べて特に違和

感はない。⑥肖柏本には奥書・識語が無く、書名の由来は添付の極めによったもののようである。随所で日大本との接近を示すが、桐壺巻が現存することから、実隆が日大本の作成時に用いたとされる「夢庵所持之古本」(『実隆公記』)そのものでないことは明白である⁽⁹⁾。⑧山岸明融本若紫の伝承書写者は「梶井殿」(琴山極札)。若紫の本文料紙は他よりもやや厚手の鳥の子が用いられた。脱文が多く、漢字使用率が高く、送り仮名を省略することが多い。以上八本の若紫巻の基本書誌を(表1)にまとめておく。

(表1) 各冊若紫巻の基本書誌

	A	B	C	D	E	F	G	H
①	四半本	定家	61ウ	8 10行	I型	○	○	
②	六半本	(甲筆)	65ウ	11行	II型	×	○	
③	六半本		65才	10行	I型	×	×	
④	六半本	公条	64才	10行	II型	×	(別冊か)	×
⑤	六半本		64ウ	10行	II型	×	×	
⑥	四半本	肖柏	54ウ	10行	II型	×	△	
⑦	四半本		59才	10行	II型	○	○	
⑧	四半本	梶井殿	49ウ	10行	II型	×	◎	

(注) 上から順にA段は対校諸本の番号、B段は書型、C段は伝承筆者名、D段は墨付き本文の最終丁、E段は片面行数、F段は主たる和歌書式、G段は奥入の有無、H段は付箋や傍注の有無である。またF段については大きく次の三種類に分類した。

I型：改行字下げ、行頭を揃えた二行独立分かち書き。後続の地の文が改行して続く形式。

II型：改行字下げ二行分かち書き。二行目は字下げせず、和歌の後に地の文がそのまま続く形式。

III型：改行字下げ二行分かち書き。二行目は字下げせず、和歌の後に地の文が改行して続く形式

【六半本との比較】

始めにこれら八本を、次に示す現存する定家の〈六半本〉本文、すなわち大橋寛治氏蔵『藤原定家自筆 源氏物語奥入』のなかの若紫巻における次の残存本文（略号「六」）と比較してみよう。

くるをいとおかしきもてあそひなりむ

すめなとはたかはかりになれは心やすく

うちふるまひへたてなきさまに

ふしおきなどはえしもすましきを

これはいとさまかはりたるかしつきくさ

なりとおほいためり（自筆本奥入、若紫巻残存本文）

結果、九本間における本文異同は、〈六半本〉翻刻文中ゴチック体で示した四箇所認められた。それぞれの箇所における諸本の本文状況は次の通りである。

1 (イ) えしも……六・定・池・伏・日・紅・肖・大

(ロ) (え) ××……明(※「え」は傍書)

2 (イ) すましきを……六・定・池・伏・日・紅・肖・明

(ロ) すましきを……大

3 (イ) なりと……六・定・池・伏・日・紅・大

(ロ) と……肖・明

4 (イ) おほいためり……六・定・池・伏・日・紅

(ロ) おもほいためり……肖・大

(ハ) 思ほひためり……明

同じく定家監督書写本でありながら、「六」〈六半本〉と「定」(新出四半本)は、若紫巻においても本文異同は見られず、それが確認できたのは肖柏本・大島本・明融本といった室町期の写本ばかりであった。

就中、定家の〈四半本〉に最も近いとされてきた大島本が、4の「おほいためり」を「おもほいためり」とし、更に2においても、本来なら「すましきを」とすべきところを、一本のみ「すましきを」としている点は注目される。しかもここは物語本文の末尾部分である。大島本の当該箇所(五十九丁表)は、それ以前に記された物語本文とも、それ以後に記された奥入部分とも、筆風が異なっている。藤本氏の解説によれば、最終丁のみ、底本の筆風に似せて書写したのだろうとされているくだりである。もしそうならば尚更のこと、2と4は大島本の誤写では無く、底本通りであった可能性も出てこよう。また最終丁のみ筆跡を似せて書写していたとするならば、当然字母も一致するはずである。試みに、大島本と新出四半本の字母を比較して見た。

(表2) 大島本末尾部分と新出四半本の字母比較

(新出四半本) 久累遠以止於可之幾毛天安曾比奈利 武寸免奈止者

(大島本) 久留遠以止遠可之幾毛天安曾比奈利 武春女奈止者

多可者可利爾奈礼八 心・・也寸久宇知不留末比
多可八可利爾奈礼八」心・・也春久宇地布留万比

部多天奈幾左満爾 不之於幾奈止八衣之毛寸・末之幾遠 己礼者以
遍多天奈幾佐万丹 婦之於幾奈登八盈之毛春左末之幾遠 古連八以

止 左満可者利堂累加之川幾久左奈利止 於保・以堂免利
止 佐万可八利多留加之徒幾久左奈利登 於毛本以多女利

大島本の「記号以降が筆跡を似せたとされる最終丁であり、ゴチツク部分が字母の異同箇所である。「新出四半本」との字母の相違は合計三〇文字、最終丁においても字母の異同は確認できた。ということとは、底本の筆跡に似せたという前提に立つならば、少なくともこの「新出四半本」は大島本の直接の底本ではなかったことになる。

先の新見論文によれば、「新出四半本」に若干の独自異文が見られることから、同本は現行諸本の直接の祖本では無いだろうという判断を示されていた。だがその独自異文の多くは誤写とみられるものである。定家本なら明らかな誤写でもそのまま転写するという意識が果たしてどこまで浸透していたのか、それが曖昧なため、稿者にはそこまで言い切る自信は無いのだが、少なくとも大島本に関していえば「新出四半本」は底本では無いと思われた。

【若紫卷全体の異同調査】

ともあれ三条西家本から見ると、〈六半本〉との比較においては紅梅文庫本・日大本ともに異同は見られなかったわけである。

では「新出四半本」と比較して、若紫卷全体ではどうなのだろう。本文の位相は、他との比較によってより顕著になる。よって紅梅文庫本と日大本のみならずその他の諸本も適宜採り上げてみたのだが、その中には書き入れ訂正の目立つ写本もある。そのため比較の際には、

(Ⅰ) 訂正以前の本文(すなわち本行だけの比較)

(Ⅱ) 訂正以後の本文(すなわち本文訂正の加筆結果をとりいれての比較)

右のふたつの面から確認していくことにした。結果は次表の通りである。本行だけを比較した(Ⅰ)の場合、「新出四半本」との異同数が最も少ないのは日大本であった。しかもその数値(一一七)は、伏見本(二四〇)や大島本(一五六)より遙かに少ない。レースに喩えるならば、「新出四半本」に最も近いのが日大本、第二グループの伏見本と大島本がそれに続き、更に第三グループの紅梅文庫本(一六一)と池田本(一六七)が、かなり離れて肖柏本(二八二)が、最後に明融本(四三二)ということになる。

なお(Ⅰ)によれば、紅梅文庫本と池田本の異同数は極めて近似している。この点についてはNgramによる計量的な処理法を用いた齊藤鉄也氏の報告でも⁽¹⁰⁾、このふたつの若紫は「本文は非常に似ている」との判定であった。稿者の数値はあくまでも「新出四半本」との距離(異同数)を測ったものにすぎないが、齊藤氏の調査によって、この両本は相互に「非常に似ている」という数値結果を得たわけであ

る。また同じく齊藤論文によれば、大島本若紫もまた「これら二写本（稿者注、紅梅文庫本と池田本のこと）と大島本の写本間距離は相対的に近い」と言え、互いに本文は似ている」とのことであった。

ところが（Ⅱ）になると、大島本（七一）が逆転首位に立ち、その後日大本（二〇七）と伏見本（一一八）が続くという結果になった。異同数の少ない上位三本という点では（Ⅰ）（Ⅱ）変わらないが、訂正後

日大本が一番近い！

新出「若紫」との 本文異同：Ⅰ

諸本名	新出本との異同数
日大本	117
伏見天皇本	140
大島本	156
紅梅文庫本	161
池田本	167
肖柏本	282
山岸明融本	432

新出本「若紫」（訂正後の本文）に対する、諸本文の異同。

但し対校諸本は、本行のみを対象とした（訂正補入を無視）

- 1本文異同は文節単位でカウントした。
 2漢字片仮名表記法による相違は、異同として不採用。
 3仮名遣いによる相違も、異同として不採用。
 4音便による相違は、採用。
 5送り仮名による相違は、「給ひて」「給はて」「給て」など、対校諸本間に異同が見られた場合のみ、採用。
 6「二条院」「二条の院」などの相違は、採用。

伏見本よりも、
大島本や日大本の方が近い

新出「若紫」との 本文異同：Ⅱ

紅梅文庫本はⅠよりⅡの数値が高い。
訂正によって、〈四半本〉から離れたということである。
肖柏本に近い本文で補正したためか。

諸本名	新出本との異同数
大島本	71
日大本	107
伏見本	118
池田本	132
紅梅文庫本	175
肖柏本	269
山岸明融本	374

新出本「若紫」（訂正後の本文）に対する、諸本文の異同。

但し対校諸本は、訂正補入後の本文で比較した

- 1本文異同は文節単位でカウントした。
 2漢字片仮名表記法による相違は、異同として不採用。
 3仮名遣いによる相違も、異同として不採用。
 4音便による相違は、採用。
 5送り仮名による相違は、「給ひて」「給はて」「給て」など、対校諸本間に異同が見られた場合のみ、採用。
 6「二条院」「二条の院」などの相違は、採用。
 7異文注記・振漢字・読み仮名など、注にかかわる傍書は無視した。

の大島本は定家本に急接近し、他の諸本を大きく引き離している。やはり若紫巻においても、大島本は訂正加筆によって定家の〈四半本〉に近づいたといえそうである。但し大島本の場合、その本文訂正は底本の見直しによってなされたのか、それとも底本とは別の校合本（その場合、底本よりは定家本に近かった本文ということになる）によってなされたのかは不明である。

なお前掲新見論文によれば、伏見本は大島本以上に「新出四半本」に近似している可能性があるとの指摘があった。なるほど、稿者が当初六

種の校合本と比較した時、「新出四半本」の独自異文は一〇例あったのだが、これに伏見本を加えてみたところ、そのなかの二例が伏見本と一致し、結局「新出四半本」の独自異文数は八例となった⁽¹⁾。そういう意味では伏見本はなかなか興味深い本文である。とはいっても、全般的に見ると伏見本には細々とした異同が散見されるのであって、結果

(Ⅰ)(Ⅱ) いずれにおいても、日大本の異同数の方が少なくなった。日大本は室町期の書写とはいえ、その底本は伏見本や池田本といった鎌倉期の写本よりも、定家の〈四半本〉に近かったということなのだろう。

一方、紅梅文庫本はどうかと云えば、(Ⅰ)(Ⅱ) どちらも日大本より異同数が多い。ということは、三条西家の本文史のなかでみた場合、定家の〈四半本〉若紫との距離は、初期の本文より後期になってからの方が近づいたということなのである。

なお紅梅文庫の異同数は(Ⅰ)の一六一例から(Ⅱ)の一七五例へと増えている。では他の諸本はどうなのか、(Ⅱ)の異同数から(Ⅰ)の異同数を引いた数値は次のようになった。

- ・ 大島本 (マイナス八四例)
- ・ 山岸明融本 (マイナス五八例)
- ・ 池田本 (マイナス三五例)
- ・ 伏見本 (マイナス二二例)
- ・ 日大本 (マイナス一〇例)
- ・ 紅梅文庫本 (一四例)
- ・ 肖柏本 (三八例)

大島本から日大本までは、程度の差こそあるものの、数値はいずれもマイナスになっている。つまり訂正によって「新出四半本」との本文異同

が少なくなったわけである。ところが肖柏本と紅梅文庫本は、逆に異同数が増えており、その分だけ離れてしまっている。なぜだろう。紅梅文庫本の書き入れについて、検討し直した方がよさそうである。

二、紅梅文庫本若紫巻の書き入れをめぐる

【若紫の書き入れは後代のものであったこと】

紅梅文庫本は書影をみる限り、手沢本としてあれこれ自由に書き入れを施されてきた写本では決して無い。とはいっても、書き入れが皆無というわけではなく、若紫の場合、墨筆によるそれは全部で二一例を数えた。今それらを大別すると、次のようになる。

- (a) 補入・見せ消し記号を付しての〈本文訂正〉 : 九例
- (b) 記号を記さずに異文を傍書しただけの〈傍書〉 : 九例
- (c) 尻付き「イ」を付した〈異文注記〉 : 三例

右以外に、語句解説や主語引歌の明示といった類いの注釈は一切無い。また右の三者のうち(a)と(c)は書き入れ者の意図が明白だが、(b)傍書の場合は、本行を直そうとして記号を付け忘れたのか、訂正するまでは至らないが参考までに異文を示そうとしたのか、不明である。またそれらの筆跡をみるに、(a)(b)それぞれに、明らかに本行書写者以外の筆かと思しきものも含まれており、(a)と(c)の相違は書入れ者によるとも言えないようである。

ことほどさように、書き入れは扱いが実に難しいのだが、紅梅文庫本の場合、天恵ともいえる複本が出現した。熊大本である。詳細は本誌掲

載の中城さと子氏の論考「上臈局本『源氏物語』写しの二本をめぐって」、及び拙稿「伏見宮家の源氏物語享受」を参照されたい。

この熊大本、損傷が激しく現在は閲覧禁止の状態ではあるが、全巻揃いである。同本のモノクロ・マイクロフィルムで紅梅文庫本と照合した結果、朱の鈎点や一部の墨筆書き入れが、両本に共通して確認できた。全冊にわたって加えられた鈎点（紅梅文庫本は朱筆。おそらく熊大本も同様だろう）は一、二例ほど、どちらかに欠けた例もあったが（書き落しだろう）、ほぼ共通している。また紅梅文庫本にのみ見える書き入れが若干存在したが、熊大本にのみ見える書き入れは、一部の鉛筆書きを除いて無かった。

ということは、これら両本に共通する書き入れは、底本であった（上臈局本）、もしくは祖本であった（文明本）からの継承だった可能性が強いということである。

無論、底本とは無関係に、熊大本に独自に書き入れが加えられ、それらも含んで、紅梅文庫本が熊大本を転写し、その後紅梅文庫本にはさらに独自の書き入れが加えられたという解釈も、理論上は考えられよう。だが本誌掲載の齊藤鉄也氏の論考「仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け」によれば、紅梅文庫本横笛巻の仮名字母の出現傾向は三条西実隆のそれとかなり一致しているにもかかわらず、熊大本横笛巻のそれは実隆の字母遣いとは全く無関係だという。もし紅梅文庫本が熊大本を転写して完成したのであれば、かかる現象は決して起きなかっただろう。

よって熊大本も紅梅文庫本も、底本を、書き入れに至るまで忠実に転写したが、紅梅文庫本にはその後、独自の書き入れが施されていたも

のと解釈しておく。

右の前提に立つて、当初の、紅梅文庫本における二一例の書き入れを、熊大本と比較してみた。結果、そのすべてが熊大本では確認できなかった。ということは、これらはすべて紅梅文庫本に独自に加えられた書き入れだったことになる。すると（上臈局本）なり（文明本）なりの本文自体が、訂正書き入れによって「新出四半本」の本文から離れたというわけでは無かったようである。

【紅梅文庫本に加えられた書き入れの分析】

では（上臈局本）を転写した後、紅梅文庫本にはどのような書き入れが加えられたのか。諸本の状況を踏まえながら（a）から（c）まで順を追って見ていこう。以下、各例行頭に付した①～④は通し番号。その下に紅梅文庫本の本文を掲げ、その中のゴチックの部分に対する諸本の本文状況をイ～ニに分類しまとめておいた。猶、異文をまとめるに際し、諸本間の漢字・仮名等の表記法による異同や「お」「を」などの仮名遣いによる異同は捨象し、また参考のため熊大本（略号「熊」）と、また河内本を代表して尾州家本（略号「尾」）も加えておいた。

（a）記号を付しての本文訂正（九例）の場合

① おなしこし葉（。かき）なれと（紅二丁ウ／大成一五一頁④行目）

イこし葉…定池伏日熊肖大明

ロこし葉（。かき）…紅

ハこしはかき…（尾）

② かのおは（。北ノ方）に（二六ウ／一六二⑦）

イをはに…定池伏日熊大明

口おは（。北ノ方）に…紅

ハをは北のかたに…肖（尾）

③ あまきみ（。いて）ひか事き、給つる（一九オ／一六四⑤）

イあま君…定池伏日熊肖大明

口あまきみ（。いて）…紅

ハあまきみいてや…（尾）

④ のたまはせきこえさするも（。あさくは）いか、と（二〇オ／一六四⑪）

イいか、と…定伏熊大

口（。あさくは）いか、と…紅

ハあさくはいか、と…池日肖明

ニあさくはいかてかと…（尾）

⑤ 山水に心もとまり侍ぬれと（二三ウ／一六六⑧）※「も」の右に「ヒ」

イ心とまり…定池伏日肖大

口心もとまり…紅

ハ心もとまり…熊（尾）

⑥ おほしたり（。その、ちは）ひ、なあそひにも（二六ウ／一六九⑨）

イおほしたり…定池伏日熊大明

口おほしたり（。その、ちは）…紅

ハおもほしたりその後…肖

ニおほしたりその後…（尾）

⑦ 心ほそくて（。おきふし）なけきたまふ（三七ウ／一七七①）

イ（ナシ）…定池伏日熊肖大明

口（。おきふし）…紅

ハおきふし…（尾）

⑧ （。少納言）とふらひて侍しかは（三七ウ／一七七⑤）

イ（ナシ）…定池伏日熊肖大明

口（。少納言）…紅

ハ少納言…（尾）

⑨ そのさきに（。物ひとこと）きこえをかんとして（五五ウ／一八九⑩）

イ（ナシ）…定池伏日熊大明

口（。物ひとこと）…紅

ハ物ひとこと…肖（尾）

以上（a）の本文を訂正した結果、紅梅文庫本は九例すべてにおいて熊大本から離れ、④を除く八例において日大本と「新出四半本」からも離れてしまっている。離れた結果、どこへ向かったかと言えば、⑤以外はすべて河内本系の本文に近づいたようである。

（b）異文を傍書した場合（九例）

① ふかき（山）さとは（五オ／一五三⑬）

イさとは…定池伏日熊大明（尾）

口（山）さとは…紅

② てらにこもり侍り（ル）とは（二二オ／一五九④）

イ侍りとは…定池日熊大（尾）

口侍り（ル）とは…紅

ハ侍とは…伏肖明

③ いとくるしくおもはずに（おほえ給ふ）（二八ウ／一七〇⑫）

イおもはすに…定池伏日熊肖大明
口おもはすに（おほえ給ふ）…紅

ハ思はすにおほえたまふ…（尾）

④ おもひたち給へるを（みちに）しくれめいて（三七ウ／一七七①）

イおもひたち給へるを…定池伏日熊肖大明

口おもひたち給へるを（みちに）…紅

ハおもひたち給へるみちに…（尾）

⑤ 恋しくもまたみ（ハ）をとりやせん（四一ウ／一七九⑭）

イまたみはおとりやせむ…定池伏日（尾）

口またみ（は）おとりやせむ…紅

ハまたみをとりやせん…肖熊明

⑥ ゆくさきの身のあらんことなとまでも（ハ）おほししらす

（五一オ／一八六⑩）

イことなとまでも…定池伏日熊肖大明

口ことなとまでも（ハ）…紅

ハさまなといさても…（尾）

⑦ あはれにおほしやらるれと（ハ）さて（五三オ／一八七⑬）

イおほしやらるれと…定池伏日熊肖大（尾）

口おほしやらるれと（ハ）…紅

ハおもほしやらるれと…明

⑧ すきかましきやうなるへき事（りとも）（五四ウ／一八八⑭）

イやうなるへきこと…定池伏日熊肖大明

口やうなるへき事（りとも）…紅

ハかへい事…（尾）

⑨ いとわか（いわけな）けれど（六二オ／一九四①）

イわけけれど…定池伏日熊肖大明（尾）

口わか（いわけな）けれど…紅

以上（b）では九例すべてにおいて、日大本は「新出四半本」と一致しており、その中であって紅梅文庫本の傍書は、⑤を除く八例において「新出四半本」や日大本から離れている。この⑤の場合、傍書「ハ」を加味すると、それまでは同文だった熊大本から離れ、日大本や「新出定家本」に一致したようである。では残る八例は、離れた結果どこへ向かったかと言え、河内本系の本文に近づいたのが③④の二例で、この六例①②⑥⑦⑧⑨はすべて独自異文となった。例えば⑨の場合、紅梅文庫本の加筆者は「いとわけけれど」とあるこのくだりに「いといわけなけれど」という本文を想定して「いはけな」と傍書したのだろう。だがかかる本文は他に見ないということである。

（c）異文注記の場合（三例）

① かゝるありさま（き）もならひ給はす（二ウ／一五一⑨）

イありさまも…定池伏日肖大明

口ありさま（き）も…紅

ハ御ありきも…（尾）

② かのこし葉かきのほ（も）とに（七ウ／一五五⑫）

イほとに…定伏熊大明

口ほ（も）とに…紅

ハもとに…池日肖（尾）

③ とさまかうさまに心みきこゆるほと（を）（二九オ／一七一④）

イきこゆるほと…定池伏日熊

ロきこゆるほと(を^イ)…紅

ハきこゆるを(ほ)と…大

ニきこゆるを…肖明

ホきこゆるほ(と)に…(尾)

以上(c)異文注記の三例中、紅梅文庫本は①では河内本系の本文を異文注記しているが、②③の場合はそもそも青表紙本系諸本のなかでも揺れがあつて、異文注記はその揺れを反映しているようである。

以上(a) (c)を通して、紅梅文庫本に独自に加えられた本文訂正の書き入れには河内本系本文の影響が強く、傍書の場合は独自異文となることが多く、異文注記の場合は青表紙本系諸本内の揺れを反映したものであることが判った。

なお河内本系本文からの影響についてであるが、注意したいのは、これらは、河内本系本文を直接に披見して書き入れたものではないだろうという点である。なんととなれば、尾州家本や耕雲本を始めとして河内本系の若紫巻本文は本文異同が著しく、もし実際に河内本を披見した結果だったならば、とてもこの程度の分量では収まりきらなかったろうからである。おそらく講釈や注釈書といったフィルターを通して加えられた書き入れだろうと判断した。

【朱墨による鈎点】

紅梅文庫本若紫に加えられた朱筆書入れには、鈎点と朱点の二種類がある。鈎点一三箇所、朱点二〇箇所を確認したが、両者は墨の濃度や穂

先を異にしていることから、それぞれ別々に付されたものと思われる。

鈎点は多くの源氏写本と同様に、引歌・引詩といった注釈に関連した箇所被打たれたものらしい。どれも丁寧に記されており、熊大本でも同様の鈎点を確認できたことから、おそらくは底本ないしは祖本由来の鈎点と思われた。

それに対して朱点の方は、朱点と云うよりは薄い墨ベタに近い。薄い朱が本行の文字や書き入れ文字の上に、やや乱暴に打たれており、しかも前半八丁才に集中して、青表紙本系諸本の対立箇所に打たれている。該書の本文を分析するために、後代になって加えられたものかという印象である。こちらは熊大本とは全く一致しない。よって朱点については措き、以下からは紅梅文庫本と熊大本に共通する鈎点箇所について、注釈との関連からみていくことにする。

次表は、以下の要領にて鈎点箇所と諸注釈書との関係をまとめたものである。

(注)

・採用した注釈書は『源氏釈』『定家自筆本奥入』『河海抄』『花鳥余情』『三源一覽』『弄花抄』『細流抄』『明星抄』である。『山下水』は若紫巻の途中に六丁分ほどの白紙が入るため、割愛した。

・各注釈書が鈎点箇所における注釈項目を有した場合、○印を付しておいた。但し注釈書の中には、見出し語のみを掲げて具体的な注釈が無いもの、注釈書の見出しの本文が紅梅文庫の鈎点のくんだりと正確には一致しないが、内容から同類と判断したもの等も含ませている。

小計	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	通番号
	むさしのといへは	なぞこえざらんと	おなし人にやと	ありしにまさるものおもひ	くらふの山にやとりも	よしやいのちたにとて	とはぬはつらきものにや	とよらのてらのにしなるや	ときありてひとたひゝらくなる	くらきにいりても	草のむしろも	しりへの山にいてたちて	やまのさくらは	鈎点箇所の本文
	61 才	44 ウ	41 才	37 才	33 才	29 才	28 ウ	25 才	23 才	18 才	12 才	3 ウ	1 ウ	紅梅本 丁数
	193 ⑥	181 ⑭	179 ⑦	176 ⑭	174 ④	171 ⑤	170 ⑭	168 ⑨	166 ⑭	163 ⑤	159 ⑤	152 ⑬	151 ⑧	大成頁 ・行数
7	○	○	○		○		○	○		○				源氏釈
5		○	○		○			○		○				新出 四半本
8	○	○	○		○	○	○	○		○				六半本 奥入
13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	紫明抄
13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	河海抄
3				○	○								○	花鳥余情
11	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	三源一覽
7		○			○		○	○	○	○			○	弄花抄
9	○	○		○	○		○	○	○			○	○	細流抄
10	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○	明星抄

一三例すべてにおいて合致したのは『紫明抄』と『河海抄』であった。ということは、これらの鈎点は、上記二注釈書の反映だった可能性があるということである。

それに対して、鈎点と三条西家の注釈書との関係はとみてみると、例えば『弄花抄』とは六例しか一致していない。これは『定家自筆本奥入』の八例、『源氏釈』の七例より低い数値である。流石に『細流抄』そして『明星抄』と進んでいくにつれて一致数も増加して、『明星抄』になると一二例まで一致したのだが、それでも一例、一致しない例（通番号3）が残っている。

参考までに日大本の場合を見てみると、鈎点箇所は全部で一〇箇所（うち六例は紅梅文庫本と一致、四例が新出）あり、すべて『明星抄』と一致していたのであった¹⁴。

このように見てくるならば、実隆の〈文明本〉を祖本とするところの、紅梅文庫本と熊大本、この両本に共通して見られる鈎点は、三条西家関連の注釈書というよりは、むしろ『紫明抄』や『河海抄』の反映だったということになる。なぜそうなったのだろうか。

無論、これらの鈎点は、紅梅文庫本と熊大本の底本である〈上臈局本〉の段階になって、初めて加えられたという可能性もあるだろう。その場合は、勉強熱心な宮家の人物が『河海抄』『紫明抄』を片手に、独自に加えた鈎点ということになる。だが紅梅文庫本のような複本ならばともかく、伏見宮家が家の本として作成したであろう写本に、鈎点とはいえず、そうそう自由勝手に書き入れられるものだろうか。別稿で論じた如く、〈上臈局本〉はそれまでは源氏の写本が手薄だった伏見宮家が、主体的

に作成したと思われる源氏の揃い本だったのである¹⁵。一方、日大本などを見ると、同様の鈎点は各冊に確認できるものである。このように勘案するならば、紅梅文庫本と熊大本に共通してみえる鈎点は、〈上臈局本〉からではなく、実隆〈文明本〉由来のものと解釈した方が妥当なように思われるのである。では当時の実隆本にどうして『河海抄』や『紫明抄』と合致する鈎点が付いたのだろうか。

それをみるために、〈文明本〉と三条西家の注釈書との関係、そして実隆〈文明本〉と『河海抄』『紫明抄』の関係を抑えておこう。

前者については比較的明瞭である。日記に寄れば、実隆が〈文明本〉を売却した永正三年（一五〇六）八月二十二日以前の記事に「若菜上覧之。肖柏聞書少々抄出之了」（文亀四年三月二十七日条）更に「肖聞校合了」（同年八月二十二日条）とある。

伊井春樹氏に拠れば、これらは宗祇の講釈を聴聞した肖柏がまとめたところの「肖柏聞書」を、実隆が借用して抄出・校合したことを示した記事であり、この時まとめられたのが所謂〈第一次弄花抄〉だろうこと、そして現存する『弄花抄』は第二次本で、その成立は永正七年（一五一〇）とされている¹⁶。

つまり〈文明本〉の段階では、『細流抄』『明星抄』は無論のこと、『弄花抄』ですら第二次本は未だ誕生していなかったということである。〈文明本〉にそれらが反映されることはありえなかったわけである。

では『河海抄』や『紫明抄』との関係はどうだったろうか。例えば、覆勘本系『河海抄』の奥書・識語の中に見える次の一文

文明四年（壬辰）夏之比 借請彼本（源重相自筆）卒馳短毫畢

云疎紙之惡筆 旁以後見多其憚 早可令清書者也 努々

于時鳥路含梅雨 蟬声送麦秋候 向竹窓之下終出来之功而已矣」

（天理図書館蔵『河海抄』一二五六）

のくだり、この本奥書を転写させた也足軒は、割注「源重相」の傍に「通秀公也」、文末に「左少将藤臣判（実隆公也）」と加え、更に「以右筆（。本）書了 天正十七 仲春十三 素然（花押）」と追記しているのである^{〔17〕}。

ということは、也足軒素然（中院通勝）の証言に拠れば、文明四年（一四七二）夏頃、当時まだ十八歳だった実隆は、素然の祖にあたる内大臣中院通秀（肖柏の兄）自筆の『河海抄』を書写していたことになる。そして実隆はその後、文明十三年（一四八一）正月四日に、御前にて禁裏本『河海抄』を校閲し（「於御前、河海抄（二帖）相違之所々直付之」）、明応五年（一四九六）十月三日には、富小路俊通に『三源一覽』編集の相談をうけている^{〔18〕}。

この『三源一覽』について言うならば、同年十一月二十六日、実隆は序文と銘の揮毫を依頼されたようで、当日の日記には「抑俊通朝臣花鳥余情與河海抄一具書之、企抄出、銘併序事先日所望之。今日閑暇之間草遣之。注左」とある。この「注左」以下が、俊通に送った序文の写しとなっているのだが、『紫明抄』について言及している箇所があるので、そこを抜粋してみよう。

抑も四辻の宮の御抄は、おほくは素寂か紫明抄をひきうつされ、素寂抄は又そのかみ（。ヨリ歟）のもろくの説をあはせのせたり。しかれはいま別に諸家の注解をかんかふるにをよはすといへとも、紫明抄のうち、河海にもれたる所も、もしとりもちゐて、詮要たら

んことをは、さらにこれをくはへ…、（『実隆公記』）

これによれば、『河海抄』には『紫明抄』からの引用が多いこと、『紫明抄』は古くからの諸説を載せていること、よって『紫明抄』にある項目で『河海抄』に漏れたものであっても、詮要な項目の場合はこれを加えたところ。

どうやら『紫明抄』を加えたのは実隆の案だったようで、彼が『河海抄』のみならず『紫明抄』にも関心をもっていたことが窺われるのである。『三源一覽』関連事項は、伏見宮家の「上藤局本」が成立した翌年のことではあるが、それ以前から実隆が『河海抄』『紫明抄』にも目配りをしていたことは明白だろう。それが〈文明本〉の鈎点となって、紅梅文庫本や熊大本に伝わったということなのではあるまいか。

三、紅梅文庫本の料紙について

紅梅文庫本の料紙は、後補本である総角卷以外、冊による相違は感じられなかった。いずれも紙質こそ薄い、比較的滑らかで、はりもある。こうした観点から、当初は楮斐漉き混ぜかと判断したのであった。また墨の滲みも殆ど見当たらないことから、当然、打紙加工も施されているものと考えていた。

しかし今回機会に恵まれて、3D高精細デジタルマイクロスコープで若紫巻の料紙を確認したところ、おそらく楮紙主体であり、しかも驚くべきことに、殆ど打紙処理が施されていないことが判明した。

打紙とは、紙面の平坦化・潤滑化を図るために、漉き上がった和紙に湿り気を与えて、槌などで根気強く叩いていく加工のことである。それ

によって和紙に含まれている微細な植物繊維を、更に潰して表面上の凹凸を無くし、隙間を埋める事が出来る。古くは「正倉院文書」「延喜式」でも言及されており、溜め漉き時代であった奈良・平安時代においては、必要不可欠な加工処理だったようである⁽¹⁹⁾。

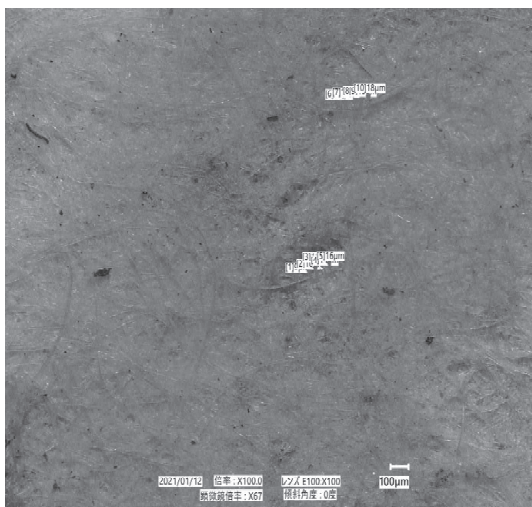
次に澤山茂氏（もと本学食生活科学学科教授、現在は文芸資料研究所客員研究員）にキーエンスVHX-7000を用いて撮影していただいた画像【A・B・C】を掲示する。この三葉の写真は、ともに紅梅文庫若紫巻二丁目裏⑤行目にある補入傍書「かき」の「か」に付された朱点部分を倍率・深度を変えて撮影したものである。全体的に赤みがかった色合いなのは、フォーカスを決めた箇所が朱筆による書き入れ部分だからである。

写真【A】【B】は共に照明リングの片側（上側）から光を当てて撮影したもので、2D画像。但し【A】が倍率を一〇〇にしたのに対して【B】は五〇〇倍である。一〇〇倍程度の画像【A】ではあまりよく判らないが（実際、稿者が持っている二五〇倍まで拡大可能なハンディ顕微鏡でも、よく判らなかった）、五〇〇倍の画像【B】になると、繊維と繊維が立体的に交差していること、換言すれば繊維と繊維の隙間が空いていて、あまり目が詰まっていなことが確認できる。

紅梅文庫本2丁ウ⑤行目傍書「かき」朱点部分拡大図：
（キーエンスVHX-7000）澤山茂氏撮影

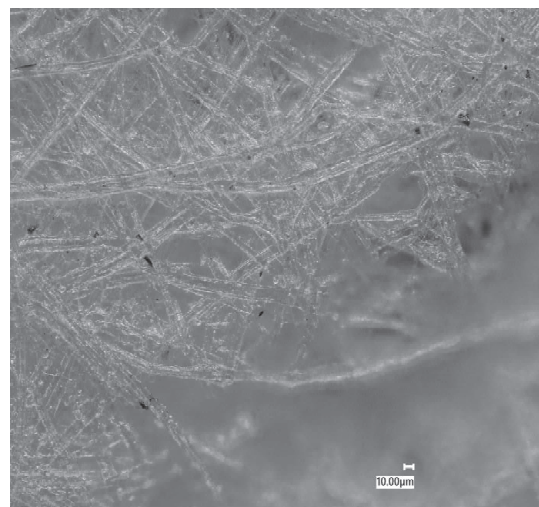
【A】×100倍

・リング片射上・2D画像



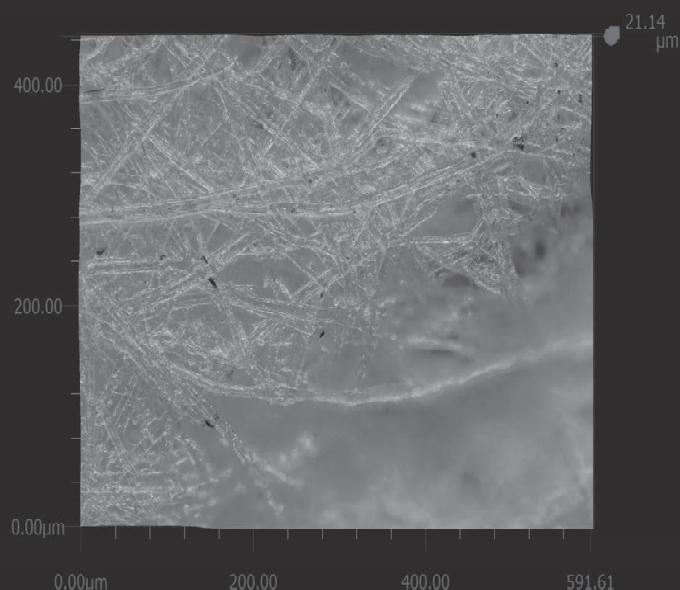
【B】×500倍

・リング片射上・2D画像



C

紅梅文庫本若紫
2丁㊦行目傍書
「かき」朱点部分



×500倍
リング片射上
3D深度合成画像

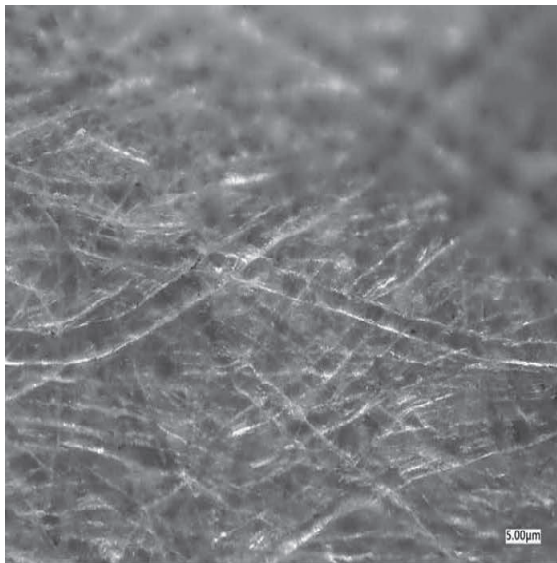
キーエンス
VHX-7000
澤山茂氏撮影

そのことは写真【C】でも、数値で確認できるだろう。こちらは同一箇所を五〇〇倍で撮影し、更に料紙における各点の深さを3D深度合成しながら機械が撮影・計測したものである。当該箇所における最大深度は二・一四mmのようだが、右下のぼやけた部分は、それより高くとび出ているために、焦点が合わなかったものである。何らかの事情でこのみ轟立ってしまったか、あるいはたいていないので、それだけ高低差にばらつきが出たということである。

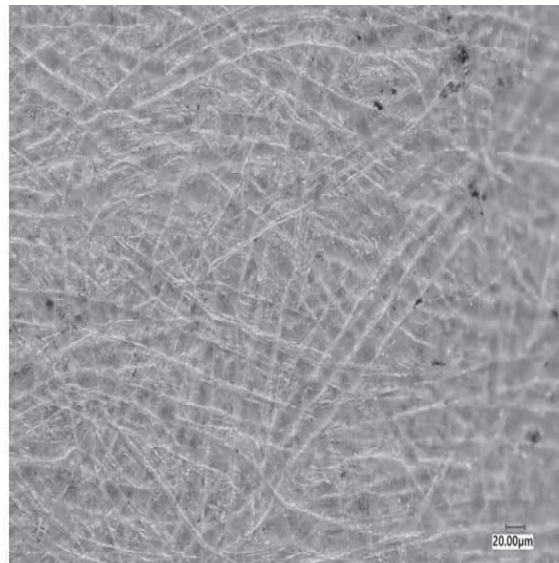
比較のため、同じく澤山氏にお借りした画像を上に掲げてみよう。左右共に、実践女子大学文芸資料研究所蔵の伝藤原為家筆河内本源氏物語薄雲卷大四半切「若君はらまれ」（表面）「おほししるゝ」（裏面）の五〇〇倍画像である。楮を用い、なおかつ打紙処理を施したものである。もと列帖装だった一葉を切り取り、未だ相剥される以前の原資料である。なるほど同じ五〇〇倍でも、こちらの方は平面化が進み、繊維と繊維の間の目がぎっしり詰まっていることがよくわかる。

この伝為家筆河内本切、もとは鎌倉期の写本だったようで、紙面を観察した澤山氏に拠れば、極上の打紙だという。鎌倉時代の公家達の写本は四半本にせよ六半本にせよ、小型本が一般的だろう。それが物語には珍しい大四半という大きさで、しかも極上の打紙処理まで施した用紙だったという。

言うまでも無いことだが、打紙は長時間にわたって根気強く叩いていかなければならないので、かなりの人手と時間がかかる。当然、値段も跳ね上がる。かなりの高級品である。紙屋院など和紙作りが国家事業としてなされていた上代・中古ならばともかく、鎌倉時代にこのような大



若君片右からx500左側薄い部分2D



おほししらるうへのx500_2D_1楮紙

型高級紙を、それも大量に供給できた人物は、よほどの権勢家だったに違いない。

一方、室町期の写本である紅梅文庫本では、打紙処理が施されていないことが判った。そこから連想されるのは、制作者側の資力の相違である。無論、朝廷はかつての力を喪い、公家たちもまた地券を有する莊園からの納税は滞り、生計を維持するのに苦勞していた、そんな時代である。しかも紅梅文庫本は、伏見宮家の家本として作られたのでは無く、その複本である。打紙加工をしていない紙（只の紙）が用いられたのも、やむを得ないことと領けよう。

ただ当時において、素紙で源氏写本を作ることが一般的だったのか、それとも極めて特殊なケースだったのかを確認しておきたい。

例えば『実隆公記』永正五年（一五〇八）の記事に

「良椿来、水打事（美濃紙六帖鳥子一帖）申付之」（六月二十六日）

「良椿水打料紙等持来、早速神妙也」（同二十九日）

等とある。良椿は三条西家に出入りの経師。その彼に美濃紙六帖と鳥の子紙一帖の打紙加工（「水打」）を依頼したところ、三日後には完成して戻ってきたと読めよう。ということは、美濃紙にせよ鳥の子にせよ、当時は打紙加工を施さない状態で流通していたということである⁽²⁰⁾。実隆はこの場合は打紙処理をさせたが、そうしない場合もあったようで、例えば先母追善供養法要のために菩提寺に届ける法華経書写の際には「素紙」を用いたとある（文亀四年閏三月十四日条）。

同じような事例は、鎌倉時代の資料からも推測できる。例えば鎌倉時代末期にまとめられた尊円法親王の『入木抄』『御筆の事』項によれば、

「凡筆を用事、料紙により候也。打紙には卯毛、只の紙には鹿毛にて候：」とある。料紙が「打紙」か「只の紙」かによって、筆もまた替えよというのである。そして打紙に書写する際に用いよとされた「卯毛」とは、うさぎの毛で作った筆のことで、「筆は第一兎毛よし」(『夜鶴庭訓抄』)とあるように、当時は最上級の筆だったらしい。

ということは、鎌倉・室町時代に入ると、打紙はもはや和紙作りに必要不可欠な工程ではなく、高級な筆に似合う高級加工紙と受け止められていたということなのだろう。換言するならば、只の紙であつても筆を工夫することによって、書写が可能となっていたということである。おそらくその背景には、製紙法自体が、かつての溜め漉き時代から流し漉き時代へと変化し、それに併せて漉き方の技術も改良されていったことも影響しているのだろう。

手近なところで、素紙が用いられた例を集めてみると、例えば高田信敬氏によれば、伝一条教房筆一条兼良細字書入れの大四半源氏物語切もまた「楮素紙」で打紙加工は施していないという⁽²¹⁾。文芸資料研究所にもそのツレとおぼしき古筆切があるため、確認してみたところ、やはり打紙加工は施されていないようであつた⁽²²⁾。また実践女子大学所蔵の山岸文庫蔵伝明融等筆源氏物語(四四冊)の場合は、冊によって書写者が変わり、本文料紙も変わっている。打紙についていえば、打つてあるもの、打つてないもの、識別に迷うもの(打ち方の度合いが少なかったか)など、様々であつた(因みに若紫巻は打紙処理の鳥の子である)。版本の時代に入ると、慶長古活字版源氏物語・絵入源氏物語・湖月抄などは、いずれも打つていない。非能率的な打紙加工に替わって、填料を加えていったようである。

ということで、室町時代の源氏写本には本文料紙に素紙を用いることも皆無では無く、依頼者の状況や目的等に応じて、さまざまであつたことが確認できたように思う。もし仮に、紅梅文庫本の料紙が厚手の鳥の子で、しかも見事な打紙加工品だったとしたならば、高貴な相手への献上品か、財力のある武家からの依頼品として作成されたという可能性も生じようが、そうでは無かつたらしいということである。

注

- (1) 拙稿「紅梅文庫旧蔵本源氏物語「若紫」巻解説・影印」(実践女子大学文芸資料研究所「年報」四十号、令和三年三月)
- (2) 中城さと子「上藤局本『源氏物語』写しの二本をめぐって」(本誌掲載)
- (3) 国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース
(<https://kotensekinijl.ac.jp/biblio/100137183/>)
- (4) 拙著『源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相』(二〇一九年、武蔵野書院)
- (5) 大河原元冬監修・藤本孝一解題『定家本源氏物語 若紫』(二〇二〇年 八木書店)
- (6) 新見哲彦「新出「若紫」巻の本文と巻末付載「奥入」——定家監督書写四半本『源氏物語』との関係を中心に——」(二〇二〇年十一月「中古文学」一〇六号)。
- (7) 中野幸一「追記細説」(平成三年、古典文庫第五三三『伏見本源氏物語 二』)

(8) 藤本孝一「大島本源氏物語の書誌的研究」(平成九年、角川書店『大島本源氏物語 別巻』)

(9) 日大本を作成するときに実隆が利用した「肖柏所持古本」は桐壺巻を欠いていたようで、公条書写の大永本と校合する時には、やむなく飛鳥井雅康筆本を利用したらしく、日大本桐壺の校合識語には、「享祿三年六月廿七日 読合入落字等了(古本闕 故雅康卿筆也)」とある。天理藏本は桐壺巻を含み、後補ではない。

(10) 齊藤鉄也「Zsarn」を用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(一)」「(本誌掲載)。

(11) 伏見本を加えた結果、新出四半本(訂正以後の本文)の独自異文は、以下の八例である。なお諸本の校異を表示する際、表記法による相違は割愛した。

・かやうやうなる人(四半本一二丁オ／大成一五九頁⑦行目)

※四半本は「かや」の「や」に墨の汚れあり。あるいは見せ消ちか。

※諸本「かやうなる人」池伏肖明大／「かうやうなる人」紅日

・をしのたまへは(一五オ／一六一②)

※四半本「おし」は「をしあてに」の誤写か。

※諸本「をしあてに」池伏紅日肖大明

・みたまで(一二オ／一六七③)

※四半本は「みたまひて」の誤写か

※諸本「身給て」伏紅肖大「(補入)明「(ナシ)」池日

・御心さしあらは(一二ウ／一六七⑪)

※諸本「もし御心さしあらは」池伏紅日肖大明

・みしほと(二九オ／一七二⑬)

※諸本「身しほとを」池伏紅日肖大明

・まとの(四六ウ／一八四⑩)

※諸本「まことの」池伏紅日肖大明

・給つらむも(五四ウ／一八九②)

※諸本「給へらむも」池紅日肖大「給らんも」明

・少納も(五九ウ／一九四⑤)

※諸本「少納言も」池伏紅日肖大明

(12) 熊大本にはごくまれに鉛筆書きかと思われる書き入れも見える。例(若紫16ウ・18ウ)等。

(13) なお(Ⅱ)における異文算出時、異文表記は注釈の一種と見做して当所からこれを省いていたが、傍書の場合はこれらを加えて計上した。但し(Ⅱ)のなかには、本文訂正や傍書によって、逆に「新出四半本」に一致した例もあった。

(14) 但し「くさのとさしにさはりしもせしと」(紅梅文庫本四四丁ウ)は、その注釈内容から「立ちとまり」項の注釈と判断した。

(15) 拙稿「伏見宮家の源氏物語享受―貞成親王・邦高親王の場合」(本誌掲載)を参照のこと。

(16) 伊井春樹「肖柏の源氏学とその発展」(昭和五年 桜楓社『源氏物語注釈史の研究』)。

(17) 熊本大学附属図書館蔵『河海抄』卷一識語。

(18) 『三源一覽』の経緯について『実隆公記』では、初出記事に「俊通朝臣来。河海花鳥兩部一具、可抄出之支度也。其事相談之、愚存分粗示之了」(明応五年十月三日)とあり、俊通自身は当初『河海抄』と『花鳥余情』だけを対象としていたことが窺われる。日記にはその後も十一月二十

日・同二十二日・同二十三日・同二十六日と関連記事が続き、十一月二十六日頃に完成したものと思われる。

(19) 『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年、岩波書店)「打紙」「熟紙」項参照。

(20) 小野晃嗣『日本産業発達史の研究』(一九八一年 法政大学出版会)によれば「中世に於て最も高価な紙は鳥子類であり、文明年間に於ては鳥子一枚代八文、或は九文四分強の高価さを示している。：(中略)さればこそ公家階級に於てもこれを使用することは稀で、永久保存を要する書冊巻数等の場合にのみ多くこれを使用したのである」(七六頁)とする。

(21) 高田信敬『文献学の葉』(二〇二〇年、武蔵野書院) 一五五頁。

(22) 伝一条教房筆源氏物語切は五葉あるがそのうち、一条兼良筆という書き入れが加わっているのは次の三葉である。いずれも打紙ではない。

- ・常夏巻切「将にとひたまふ」(25. 6×6. 9 糎、4 行)
- ・常夏巻切「さるへき御いらへなとも」(25. 8×18. 2 糎、10 行)
- ・若菜上巻切「給みむは兵部卿宮ひき給」(24. 9×7. 5 糎、4 行)